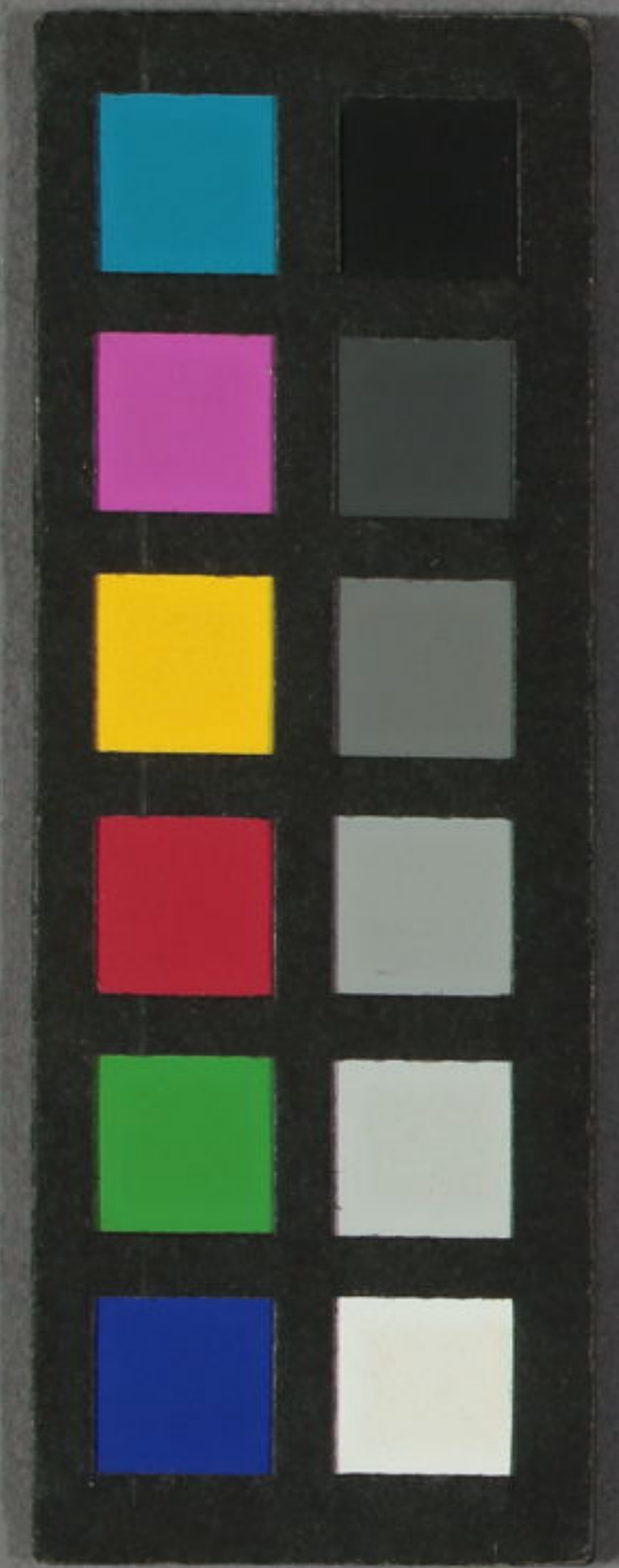


善色美對暖語

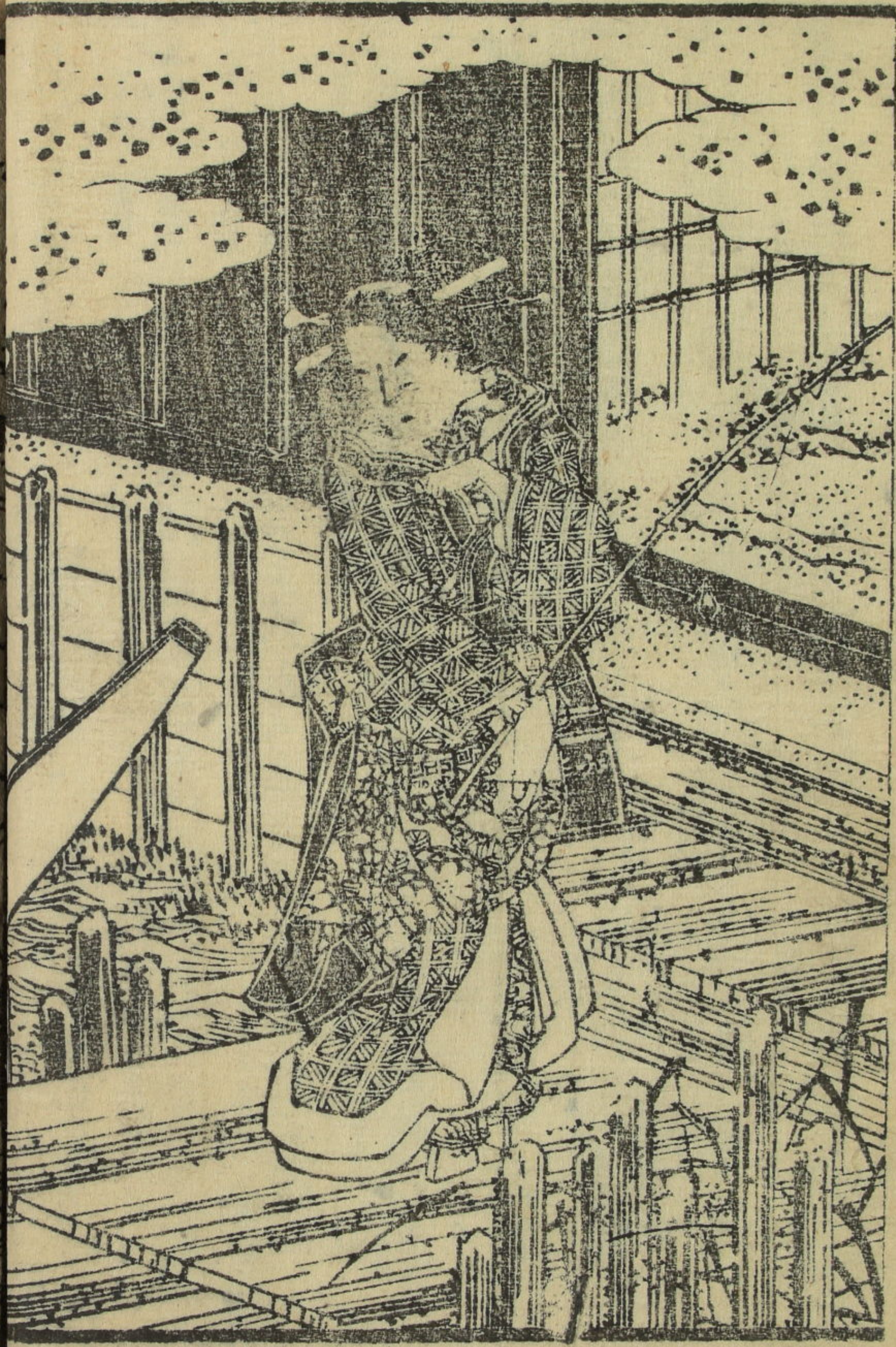
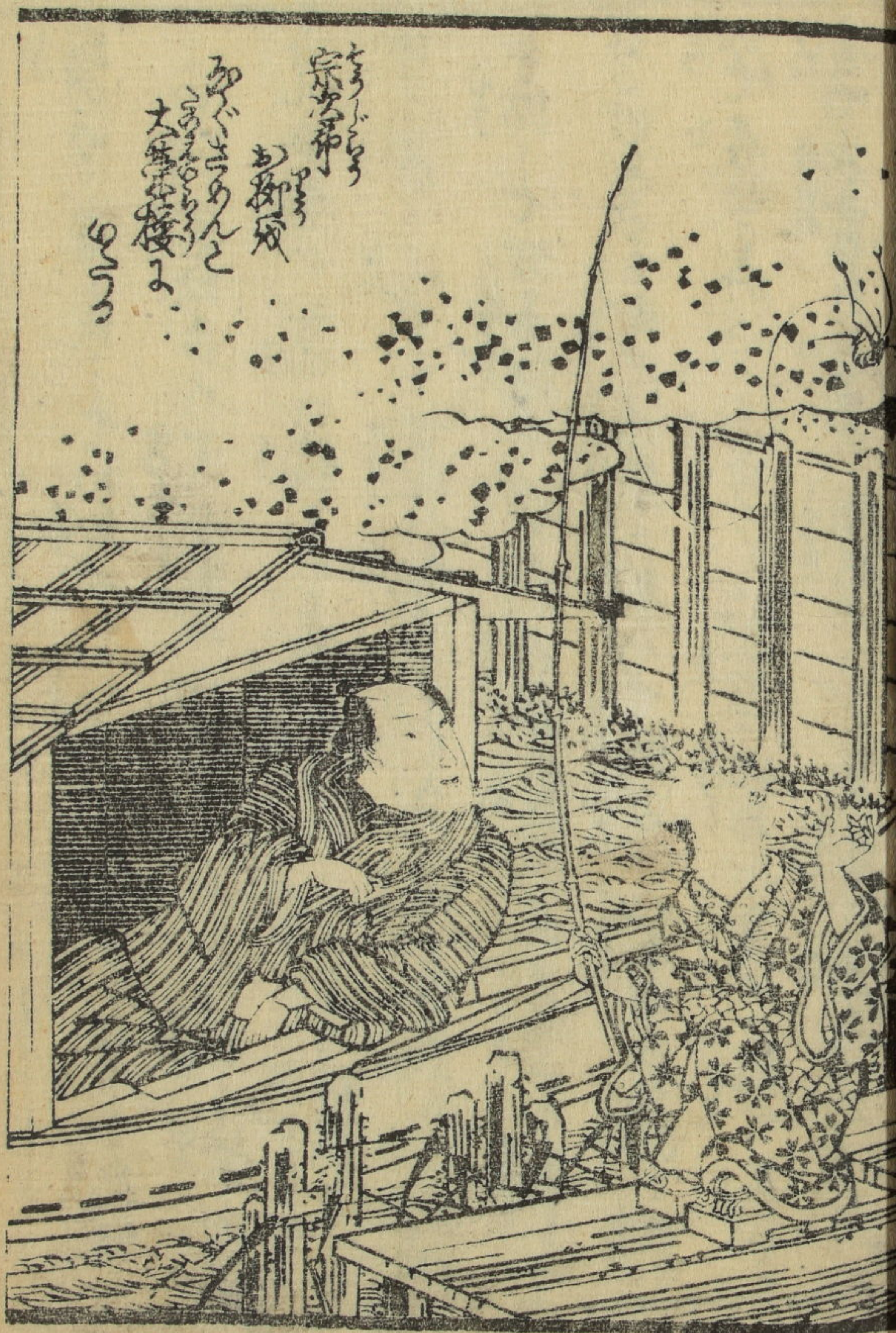
五馬
中

^ 13
3225
8



宗茂帝もびつふにさせられ給ふも其身の病の治りうらむ一
所へお柳が昇参りて二三日までと再發して世を久り見る
いとぬもあつり一申お柳の方へまぬ親の數年來も通ぬ
るせ一先の丈の種めて産一男のみお柳のおふか直りつるの
兄源三郎といふ者昇参りて母とお柳の大病を具せ種く
と世をさる一源三郎もを願ふ都合より一うらぶ村の方に
返住居してまけるが當時母の極難治を捨てまじは相違の
上母子とも被收住居引取て実意の者病急らびはしよ
月日をお守り一とを初て宗茂帝の方へて六病氣の治り一後
お柳の男の爲に身成捨て再度の勤め六二見屋之七十
兩の給金あて奥女とこそ入りまう一まて海屋の娘か
お菊がとてのちて産痛と入るさう一向のお柳の病も
他國をたふかり 柳一宗茂 宗茂さんよくあておまごお入りのまう
宗茂帝の衣裳のま流るるを情と見直して 柳一とて
多めまうら後お入都合のり極よまりまうこの入お柳
のうらで嬉しめるのうらうらごけまともお前縁がまうごけ
お柳の病も

宗茂帝もびつふにさせられ給ふも其身の病の治りうらむ一
所へお柳が昇参りて二三日までと再發して世を久り見る
いとぬもあつり一申お柳の方へまぬ親の數年來も通ぬ
るせ一先の丈の種めて産一男のみお柳のおふか直りつるの
兄源三郎といふ者昇参りて母とお柳の大病を具せ種く
と世をさる一源三郎もを願ふ都合より一うらぶ村の方に
返住居してまけるが當時母の極難治を捨てまじは相違の
上母子とも被收住居引取て実意の者病急らびはしよ
月日をお守り一とを初て宗茂帝の方へて六病氣の治り一後
お柳の男の爲に身成捨て再度の勤め六二見屋之七十
兩の給金あて奥女とこそ入りまう一まて海屋の娘か
お菊がとてのちて産痛と入るさう一向のお柳の病も
他國をたふかり 柳一宗茂 宗茂さんよくあておまごお入りのまう
宗茂帝の衣裳のま流るるを情と見直して 柳一とて
多めまうら後お入都合のり極よまりまうこの入お柳
のうらで嬉しめるのうらうらごけまともお前縁がまうごけ
お柳の病も



夏下ろし 杉原家業の都合の程のをあてまつらう 家一
高貴のまご多分 利潤もあひけきどもノ 何れもあつて
形して急のが親より川でくまらひさう 何卒飲で引
くま返り極る夏残してはしも早く けねふ急ぎくまひこ
男入申ふ丸圖くま夏で進めらまて 花柄の天神さる富
のれを買つてくまノ 柳一 ねとやふでも當つこの入笑ひ
まらうりふ 家一 ナニサ千両の小當つこのヨ 柳一 ねとやふでも當つこの入笑ひ
も言 成ぬ何れ極してそく極るともが 家一 ナニサうそぢやア

極るナそまごけきども ねれを買つこのでまひさう 一割
だけの金づらナ 柳一 ねとやふでも當つこの入笑ひ
二百八十両さうづら極るこのヨ 柳一 ねとやふでも當つこの入笑ひ
直ふけ方へあておままの久 家一 ナニサ當つ番付のゆき第
直ふ末でゆきふと思つこのけきども 金を精取あひ申ふ何れ
間透川で樂しむふさせし甲斐もあひ極るさうさうのがわら
まひものでもあひとたらのをさうとあひ 中も末あひさうが今お
金を精取と直ふ欠出してあひさうがノ け場でも思入金さう

あつがとまひてつ番當てううあぢを本宅へ連れて来ようふ
せうり高のの方へう 修めそあぢ成せものどあぢは
その個族を付振ぢやうあひう 柳「ナクニ何振でモウ私やう
け云地へあこめんづうう鬼てもものまふて及んぬぐー
全盛成ーとうう他人あも嬉ーぐとせあぢ家でも嬉
がるらうあふ金もまあけさせて引込及ヨまこあぢ様も
新治家業の所で折角お金かふに遠入このごふ事防
柳「私に剛あ居ていりうとりつて高貴の柳「あらう

六行まひヨ私ハまふ死んご亂らううてまがーの月日奉
防しとあぢ様の類をえ見ふ堪るううまも亂七家滅の
都合をううくは成まトのう時家次存ハお柳の身で自若
旅めて居る 柳「アサ何ぞね私のいあまの返らうもはあを
まろて何を自願付せおまらるるごえ 家「オ自願付ハ
はまひが久しううで逢ううまご別居あ羨慕く見入る
うう不簡が遠のてあこのサとて髪がううくまを振ふ
柳「まらる柳「早く延こしや 柳「オまご筆ヤうのドで

聖なるのをわたりまはる 宗一 左様う何様しともお糸あひ
奥女風の方が似合極ごあつらんの能よりうまか人か
ぬるごらん入ら 柳一アサキ極まともをお言せうひたし人
誰が何とつて異様ともモウくく何様しともお糸様で
一生苦勞煩さる覺悟で居まはるうきききとてごご
つてお尋るものヨ 宗一 二歳を七形して並みのう 柳一アサ
そまごが幸防でありまはる子家一何様しとて幸防が出来る
ぬる 柳一アサキ極まとも 宗一 二 柳一 幸防しとてお糸の極ま
ま流る内々成とらる極ふしと精玉しとお糸成ヨト
いと睦ましくくくごひける

第廿八回

再説 宗一 幸防の極まとも 宗一 二 柳一 幸防しとてお糸の極ま
宗一 幸防の極まとも 宗一 二 柳一 幸防しとてお糸の極ま
二百両余の金子を得て彼お糸の許へつらうし所家再真
を励ましましとてお糸の極まとも 宗一 二 柳一 幸防しとてお糸の極ま
方も捨交する義理おひくごうゆきまごく 行末を尋

あつども鬼角ふらうとう福て只母子大海の精命を近所
あておつころのミ海申ふ極者のたうらひあて田舎人引おれ
しる焼つあふおとだといふ者たうらひあまびのよく案どら
まごも珍方あくまづ思ひまくる金まふけの筋あまび野
の方へおもむき山を買て杖本を切おれまふらうと波地おり
兼てようお海する所あるら思入通り直うち下り獨
余村のよま杖本切おけまび大まふよまふとふ高う校
月おく川おの差圖をもたうらひて其身ハ只一人あて序て
踏ふ約束の蘇坊へ糸着し松戸より柴又村人出帝釈天皇ふ
讀んとおびうけら途申はて目の暮暮まうらうらうバおまき
て柴又村へうらうら所をや暮昏て田舎あ六耕作まら
人もあくねらうらうら群鳥をらうらふらうらうら遅まらるど
哀さふ見おち柄しもあまは時の時程より付ありけん
二人の悪漢横路より市後ふまらうらうらうら山道を通
あまう酒代がうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あつども鬼角ふらうとう福て只母子大海の精命を近所
あておつころのミ海申ふ極者のたうらひあて田舎人引おれ
しる焼つあふおとだといふ者たうらひあまびのよく案どら
まごも珍方あくまづ思ひまくる金まふけの筋あまび野
の方へおもむき山を買て杖本を切おれまふらうと波地おり
兼てようお海する所あるら思入通り直うち下り獨
余村のよま杖本切おけまび大まふよまふとふ高う校
月おく川おの差圖をもたうらひて其身ハ只一人あて序て
踏ふ約束の蘇坊へ糸着し松戸より柴又村人出帝釈天皇ふ
讀んとおびうけら途申はて目の暮暮まうらうらうらうらうら
て柴又村へうらうら所をや暮昏て田舎あ六耕作まら
人もあくねらうらうら群鳥をらうらふらうらうら遅まらるど
哀さふ見おち柄しもあまは時の時程より付ありけん
二人の悪漢横路より市後ふまらうらうらうらうら山道を通
あまう酒代がうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

働きの大目にも二人と一人の家やともまはさばは家次希危く
あるまはさば一愛叫んで切込む白女肩ををを
して二三寸まると流る血涙のまゆを見るより一人も親殺奪
まひる心透るに家次希行息あつて逃がせざる逃まか
希殺者の二人を三三小退りくる家次希もあつて小再殺の
勝負の思ひもよろば命うらへ一思殺をうらへ小大か
向うの方希のあふ芽の家根七八る見入けるあふ希
希の付は家次の明る家を幸ひあを便りふ大下が親を
張お合ふ第と八遠ひ心のゆらふ希をとおめて妻居小元
突懐ふとど倒して起るねまはけ家の内中希驚天一屋
を私追く一人の女女一五兄さんりくト呼聲聞て家次
希の親のあふ思ひ流くと遠記てまア、モシク何もお驚き成
者でいびるるませんゆ率あを一杯吞してお無く来ま一悪
漢小女合て逃てまのこの姿してお家へ迷惑をさす中希
ませんトのあも昔き息切色の根又風情と言教め左もあつて
推量すまどゆ断を甚るる獨をさう中一遠くうら明々に



見へて道宛あつけの荒く母をサ向つておのりあひうら大
 おぢの服差成核てうき散うして逃て来このごときを
 のが知らぬ家永く居るはまのトまよを誘き入
 引あぢめ 皆アレ多今夜は所て夜を明してお出成な
 今ッうらゆねしてお帰りの成まるのたごうおまため
 是用ひをさぶのおまはふそして知らぬの家と成ゆき
 け宅ハ私の母人さんの実正の子の宅で私のおぢの衛りの
 兄さんが松と母人さんとあて果のたごうおまためうらゆね
 意のまはあつぬせんヨ先刺おぢさんがあつておぢさん
 誰うらあぢ怖うらうらおぢのを見さんが新小舎の成を
 あて見さんくと叫まうけきともお奥の兄さんハ新川の親
 方へ帰参の出来ぬ様うを帝秋さうぬ願づけをして毎晩水
 けびて来おぢおぢをたうら明日の物たけきけきけきけき
 トあまうら母の長あうて何屋もあまの極よあま
 妻兄の世話めを所材よ引ひきま渡帝秋ま又あまの
 平愈をうらうらあ又け材よ良医者のまうけめ



知己の者の世居よそは所不復住居するのを見海邊と
いふ者嘗時浪人中のあざむる目ぐ物入すひるまは
かろ田舎小母子三人時常我清海氣もやうく又七月
必来全夜一七今日久一ぶりめて湯も入らる中我
昔けま六定次弟八やうやく安堵の思ひをうりまてその
身の上のまへにぞうくをうり一國せ當時えくとは
合も直るべき次第成きうれどもお柳のまへにさげふ
明くわて隠し居らうか實一年余るもの別はあつ

くまふ冬ぬ同養ふをやくもまゝ刺のか祿の
野風小吹送らうとてもの淋しくまがりぐねの波一舟
呼聲木精ふひびき七葉くまらんとあつとあそらり小ける
増しや私ハ先刺らうと氣が付らう一えんががお前探空腹のわ
ません久一茶ニ松戸でお一早らうとけきども夜合をま
分合さうら腹ハ城のひが先刺の一件で寔小勞まじ
し左振でぶらうのませうねんをませうやチ直小お体く
まらる松がほでまらうりませうらう左振を成らうは

